

悪人が血を流すとき悲劇は完全なもの となる——「復讐者の悲劇」について

谷 崎 寿 人

1

同時代の他の劇作家同様、シリル・ターナー（Cyril Tourneur）の生涯についてはほとんど不明である。ボウアズ（Frederick S. Boas）は「最近に至るまで彼（＝ターナー）の生涯に関してはほとんど知られていず、また現在までに確かめられた事実も彼の文学上の経歴には関係ないものである¹⁾。」と1945年に言っているが、この事情は1981年の今日でも変わっていないようである。彼の生誕の年月も1570年から1580年に至る10年間のある年とされているが、一応1575年ということになっている。冒頭、同時代の他の劇作家同様と記したが、このターナーは他の作家と比較にならぬほど不明のところが多い。生年もさることながら生地も家系もいかなる学校教育を受けたかも記録が残されていない。彼の最初の作品とみなされているものは「変身変化」(Transformed Metamorphosis) という難解な寓意詩であり、これが刊行されたのが1600年のことである。当時流行の諷刺詩の範疇にあるものである。本稿にとりあげる「復讐者の悲劇」(The Revenger's Tragedy) はジョージ・エルド（George Eld）という人物によって1607年10月7日出版組合登録簿（Stationers' Register）に記載され、同年出版されかつ国王一座（Kiugs' Men）によって上演されたが、不可思議なことに作者名が記されていないかった。その後約50年を経て1656年出版業者エドワード・アーチャー（Edward Archer）なる人物が出版した戯曲の題名表の中に作者はシリル・ターナーと記したのであり、この表中の作者名が唯一のよりどころになって現在に至っているわけである。したがって当然のことながら17世紀当時から、この作者の特定には疑問が投げかけられ、これが真の作者であると当時の劇作家の名が挙げられること数人に及ぶが、中でも有力なのがトマス・ミドルトン（Thomas Middleton）（1570～1627）である。しかしミドルトンであるという確たる証拠もなく、今日ではターナーということになっている。

1611年に出版されたのが「無神論者の悲劇」(The Atheist's Tragedy)で、これは THE ATHEIST'S TRAGEDIE: OR The honest Man's Reuenge. WRITTEN By Cyril Tourneur とまぎれもなく扉に書いてある。なおこの作品の完成は「復讐者の悲劇」の出版年と同じ1607年、しかもこれら現存するふたつの劇では、「無神論者の悲劇」の方が先であったとみなされている。

その他1609年にはサー・フランシス・ヴィア (Francis Vere) の死を悼む詩、1612年には散文によるロバート・セシル (Robert Cecil) の人物素描、また1612年も年末に近い頃、ウェブスター (John Webster 1580~1634 劇作家)、ヘィウッド (Thomas Heywood 1570?~1641 劇作家)と共にヘンリー王子 (Prince Henry 1207~72) をしのぶ哀歌調の詩集を編んでいる。この劇作家およびその他の文筆活動の前後はセシル家 (The Cecils) の庇護のもと軍人として服務していたようである。1617年まで数年にわたりベルギーのブラッセルの近くにいたが、この年帰国し、罪名は不明であるが、一時獄中にあったらしい。その後1625年10月サー・エドワード・セシル (Edward Cecil) に率いられスペインのカディス (Cadiz) に遠征した。この間不幸にして罹病し帰途についたが、1626年2月アイルランドで病死した。

「復讐者の悲劇」の原典もまた明らかでない²⁾。たとえば、アントーニオ夫人の凌辱は、長詩「ルークリースの凌辱」(The Rape of Lucrece)に材源があると思われる。この長詩は1594年に出版組合登録簿に登録され、同年「ルークリース」の題で出版されたものである。さらにさかのぼれば古代ローマの詩人オウィディウス (Ovidius) すなわちオヴィッド (Ovid) の詩にあるもので、オヴィッドの作品はすでに16世紀の中頃には英訳されていたことから、ターナーがそれを読み、自分の作品にとりいれたことは考えられることである。またラシュリオーズ (Lussurioso) (公爵の嫡男) が謀られて父公爵の寝室へ剣を抜いて押しいる場面(第二幕第三場)はヘリオドラス (Heliodorus 活躍期 220~50 ギリシアの作家) の「エチオピア史」(Aethiopian History 1587年に英訳あり)の中に同様な話がある。このように劇中の挿話には、その材料を古典に求めたところはあるようである。同時に先輩劇作家たち、たとえばトマス・キッド (Thomas Kyd 1558~94)、クリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe 1564~93) の影響もあったといえる。殊に舞台がイタリアという点では、「アントーニオの復讐」(Antonio's Revenge 1599)を書いた同時代の作家マーストン (John Marston 1575?~1634) の影響大であったろう。

ターナーの現存する劇曲は前記二作にすぎない。そして「復讐者の悲劇」は彼の作であるかどうか疑われているが、傑作であることは大方の批評家の認めるところで

ある。たとえばエリオット (T.S. Eliot 1888~1965) は次のように言っている。「ターナーは劇作家として三つの点で優れている。彼は、彼独自の方法で、筋の立てかたを熟知していた。彼は人目を引く演技をさせることに巧みであった。そして韻文のせりふを作り、用語を選択することに通曉していた。『復讐者の悲劇』は、批評家は誰しも認めるように、最高速度で走りだし、最後までその速度を減ずることがない³⁾。」また両者を比較してこうも言っている。「いずれにせよ、ターナーの天才は『復讐者の悲劇』に発揮されているが、『無神論者の悲劇』においてみられるのは彼の才能のみである⁴⁾。」

「復讐者の悲劇」における復讐の実行は二度におよんでいる。そのひとつは第三幕第五場のヴィンディス (Vindice) の公爵刺殺と、第五幕第三場の同じくヴィンディスによる新公爵刺殺である。そしてこの行為の動機は第一幕第一場で明らかにされ、急速にきわめて巧妙に第五幕へ突き進んでゆくことになる。まさにエリオットの言う最後までその速度をゆるめることなくである。

舞台となるのはイタリアのある公爵領で、時代は不明である。アスカム (Roger Ascham 1515~68 イギリスの人文学者) その他が繰りかえし述べた諺どおり⁵⁾「イタリアかぶれのイギリス人は悪魔の化身である」の時代である。つまりイタリアといえば礼節と背徳が並存するところであった時代のことである。それに主だった役の名前がそれぞれのうしろに示す意味をもっているのは寓意的である。ラシュリオーズ (Lusurioso—lecherous 好色な)、スピュリオ (Spurio—bastard 庶子)、アンビシオーゾ (Ambizioso—ambitious 野心のある) スーパーヴァキューオ (Supervacuo—too much, superfluous 余計な)、ヴィンディス (Vindice—a revenger of wrongs 復讐者)、カステイーザ (Castiza—chastity 純潔)、グレイシアーナ (Gratiana—grace 恩寵)

2

ヴィンディスの第一の復讐の動機はきわめて明白であり、それは第一幕第一場に示される。それはふたつの原因が存在している。ひとつは、公爵 (この人物は終始 The Duke とあるだけで名はない。ちなみに夫人は後妻であり、これも The Duchess とあるだけ、さらにもうひとり、この夫人の連れ子三人の男のうち名のあらわれないままのが末子 The youngest Son of The Duchess である。夫人の中の息子はスーパーヴァキューオ、上の息子はアンビシオーゾである) が、ヴィンディスの婚約者グロリアーナ (Gloriana) に懸想をしたが、拒絶されたためこれを毒殺してしまったことがある。もうひとつは、ヴィンディスの父はもとの公爵につかえていた高潔の士であっ

たが、公爵の仕打ちがひどかったため、失意のうちに世を去ったということがある。

前者の場合、ヴィンディスは婚約者の髑髏を手持って次のように語りかける。

The old duke poison'd,
Because thy purer part would not consent
Unto his palsy-lust; for old wen lustful
Do show like young men angry, eager-violent,
Outbid like their limited performances.* (I. i. 32-6)

また後者については第一場後半、ヴィンディスとその母グレイシアーナの対話の中に次のようになる。

VINDICE

The duke did much deject him.

GRATIANA

Much!

VINDICE

Too much

And through disgrace oft smother'd in his spirit,
When it would mount; surely I think he died
of discontent, the nobleman's consumption. (I. i. 123-6)

ヴィンディスの弟ヒポリトは既に公爵の宮廷に仕えていて、公爵の嫡男ラシュリオーズの信頼あつく、ラシュリオーズが女衛が入用というので兄をこれに推せんし、宮廷にはいらせて復讐の機会を求めさせることにする。

第三場でヴィンディスは変装してピアト (Piato—これには hidden「隠れた」の意がある) と名のり、ラシュリオーズに会い、気に入られ、次の命を受ける。それによるとラシュリオーズが宮廷の近くの一人の乙女を見て手紙を出したが返事がないので、直接おもむいて誘惑してこいというのである。その乙女はというとグレイシアーナの娘カスティーザであるという。ピアト (実はヴィンディス) は誘惑すべき相手が妹と知って驚くが、変装していることであるし、ともかく命とあれば母、妹を血のつながらぬ者と考えて誘惑を試みることに決意する。

これと時間的に平行して別の事件がおこっている。それは公爵夫人の末子が公爵領内のアントーニオ卿 (Lord Antonio) の夫人を凌辱したための裁判が開かれた。公爵は厳罰をもって臨んだのに対し、公爵夫人は裁判官に酌量を願う。同席した兄のアンビシオーズ、スーパーヴァキエオも弟の延命を願っている様子であるが、庶子スピュ

* 引用は Lawrence J. Ross 編 The Revenger's Tragedy (Regents Renaissance Drama Series) による

悪人が血を流すとき悲劇は完全なものとなる——「復讐者の悲劇」について

リオだけは傍白でそう願っていないことがわかる。結局公爵の命により判決は延期され、末子は獄にもどされ、一同退場するが、公爵夫人だけが残し、そこへスピュリオがこっそりとあらわれる。夫人の科白によると夫人はかねがねこの庶子スピュリオに恋している。スピュリオは夫人が父の妻であることを言いたてて、尊敬の念はあるが愛情はないと言う。しかし夫人は末子に対する公爵の態度に不満を抱きこの復讐を目論んでいる。それには庶子との姦通が公爵に対する最大の復讐行為となることでスピュリオを懸命に口説き、スピュリオも結局諾することになる。スピュリオもまた父親である公爵に対し己れの出生に関する恨みを抱いていたためである。(第二場)

第四場では、アントーニオと数名の貴族がいて、公爵の末子に凌辱されたアントーニオ夫人が恥辱のうちに生きるよりも毒を仰いで死ぬことを名誉と考えて自らの命を絶ったとアントーニオが嘆き、貴族たちは犯人の末子が助命されるようなら復讐をすると誓う。この中でアントーニオが公爵および公爵夫人をどう考えているかは次のことばにあらわれている。

ANTONIO

O, you must who 'tis should die,
The duchess' son; she'll look to be a saver.

“Judgment in this age is near kin to favor.” (I. iv. 53-5)

引用文は「この頃の裁判は情実に近い。」と言っている。公爵は好色であるだけでなく、裁判をも左右すると言う。

第二幕第一場、ヴィンディスは変装してわが家へ赴き母と妹カスティーザに面会する。ヴィンディスが公爵の嫡男の使いとして来たと言うと、カスティーザはラシュリオーズは邪悪な男と言い、ヴィンディスの頬を打ってこれが拒否の返事であり帰って伝えよと言う。カスティーザが去って、母グレイシアーナ登場ヴィンディスはラシュリオーズの手紙を出して、娘を公爵家に差し込めば裕福な暮らしになると誘う。母は結局金(かね)に目がくらむ。カスティーザ再登場して、母に口説かれるが応じない。その名のとおりに「純潔」であり次のように言う。あなたは母ではないとおわすのである。

CASTIZA

I cry you mercy, lady, I mistook you.
Pray, did you see my mother? Which way went you?
Pray God I have not lost her. (II. i. 156-8)

グレイシアーナはラシュリオーズがわが家に来てくれるのであれば娘には言うことを

きかせると言う。

第二場、ラシュリオーズとヒポリトのいる所へヴィンディス登場、首尾はどうかときかれ、娘は応じないが母親は金によって転落の道をたどっていると答えると、ラシュリオーズは早速今夜カスティーザのところへ行くと言う。ヴィンディスの独白「今ただちにラシュリオーズを殺してやろうか、いや……妹の貞操はかならず守ってやる。」そこへヒポリト再登場し、スピュリオと公爵夫人の密通を報告していると、スピュリオが従者をつれてヴィンディスとヒポリトがかくれている前を通る。ラシュリオーズ再登場、ヴィンディスに今からカスティーザのところへ案内せよと言う。ヴィンディスとっさの機転でスピュリオの一件をうちあけると、ラシュリオーズはヴィンディスを従えて夫人の寝室へ行く。

第三場、ラシュリオーズ抜刀して登場、公爵夫人の部屋へ行くと、なんたることか寝ていたのは公爵と夫人、したがってラシュリオーズの行動は謀叛となり、夫妻は大声で助けを求める。警護の役人がラシュリオーズを捕縛。ヒポリト、アンビシオーゾ、スーパーヴァキュオ登場。すきをみてヴィンディスとヒポリトは脱出。スピュリオ登場。ラシュリオーズ弁明したいと言うが許されない。アンビシオーゾたち表面はラシュリオーズを弁護し、公爵の慈悲を乞う。公爵このことばが本心かためすためにラシュリオーズを釈放すると言うと、スーパーヴァキュオは重罪であるから死刑に値すると逆のことを言う。公爵はそれならと指輪を渡して、この指輪を裁判官に示せば数日中に死刑執行となると言う。

第三幕は展開の速度がいよいよ増すことになる。第一場では指輪を持ったアンビシオーゾとスーパーヴァキュオ登場、二人はこれを裁判官でなく役人に直接手渡せば刑が直ちに執行されてアンビシオーゾが公爵の後継者となりうるとよろこぶ。スーパーヴァキュオは傍白で、さらに兄アンビシオーゾを殺し、自分が公爵となることを夢みている。なお二人で獄中の末弟を救いだそうと言う。

第二場 貴族たちラシュリオーズを釈放

第三場 アンビシオーゾ、スーパーヴァキュオは役人に指輪を示し、遺憾ながら今朝直ちに死刑執行をと命ずる。しかも見物人がおしかけぬよう内密におこなえと。

第四場 末子登場、牢番が兄たちからの手紙を渡す。それには救出の手を考えついたとある。しかしその後役人たちが登場して兄たちが死刑の令状を持ってきたので執行すると宣言する。末弟兄たちを呪咀しながら首切られる。

第五場、ヴィンディスとヒポリト登場、ヴィンディスは公爵に金（かね）をもらい女性を一人世話せよと言われ、今からここで引きあわせる手筈だとヒポリトに説明す

る。ヒポリトがその女はどこにときくと、死んだ髑髏を仮面で覆ったものを見せる。仮面をとり唇に毒薬を塗り再び仮面をかぶせて準備をしていると公爵二人の紳士をしたがえ登場、紳士を退場させた後、ヴィンディスが姿をあらわしこの女に接吻をと髑髏を公爵に近づける。公爵言われた通りにする。そこでヴィンディス、ヒポリトを呼び松明をかざさせる。その光の中でこの骸骨は公爵がかつて毒殺したグロリアーナのもので今度は逆に毒を盛られたことを知らせる。さらにこれは父と婚約者の仇をうつのだと解説し、もうひとつ公爵夫人とスピュリオの密通のことも冥土の土産にきかせてやる。兄弟に剣をつきつけられまた毒のために口のきけぬ公爵の前を折しもスピュリオと公爵夫人が密会に行く途中通過してゆく。兄弟公爵を刺し殺して積年の恨みを晴らす。

以上が復讐劇第一の頂点にいたる経過であった。ブラッドブルック (M.C. Bradbrook) が「ターナーの戯曲は外観は容易に解釈できる。なぜならば復讐劇のしきたりに従って書かれているから、もっとも彼はそのしきたりを彼独特の流儀で一部修正を施してはいるが⁶⁾。」と言っているが、先ず何故の復讐かを提示して、それにむかってきわめて坦々と進んでゆく。「しきたり」に従って、髑髏、変装、毒殺等々すべて観客の期待するであろうものは揃っている。その上復讐の対象は最初から明白であるからあとはどのような経路をたどるかである。幸いにも弟ヒポリトは既に公爵家に仕える身である。なんとか弟のつてで公爵に近づくことを得るならばそれだけ復讐の機会は多くなるのである。その機会は特にその獲得を望まないにもかかわらず機会の方から近よってきたわけである。ヴィンディスは必ずしもラシュリオーズに近づこうとは思わなかった。ラシュリオーズの方から近よってきたのだ。そしてヴィンディスは実の妹の誘惑という難題を背負わされたが、身持ちのよい妹によりなんとかきりぬけることができ、あとは当初の決意を実行に移すことが可能になったのである。こうなると人間ヴィンディスの努力もさることながら、人間の意志をこえた天の意志が働いているとみられる。ヒポリトは末子の裁判が延期となった後、こう言っている。

HIPPOLITE

.....

Judgement speak all in gold, and spare the blood
of such a serpent, e'en before their seats
To let his soul out, which long since was found
Guilty is heaven. (I. iv. 61-3) 下線筆者

庶子スピュリオが公爵夫人と密通することによって公爵に復讐するというのも、スピ

ュリオの意志をこえた大いなる意志に導かれたことになる。

3

復讐の第二のそして最後の頂点に達するにはどのような経過があったか、公爵刺殺の次の幕あきは、ラシュリオーズとヒポリトの登場である。(第四幕第一場) ラシュリオーズはヴィンディスの偽の情報提供により公爵夫人の寝室へ押し込んで謀叛人としてとらわれたことを非常に怒っているとヒポリトに告げる。そこへヴィンディスがあらわれるがラシュリオーズに「出てゆけ」と言われ退場。ラシュリオーズ、ヒポリトにむかい「おまえには兄がいるそう。その兄にピアト(変装したヴィンディス)を殺させよう。」と言う。公爵づきの二人の紳士にラシュリオーズは父公爵の所在をたずねる。

第二場、変装をとったヴィンディスとヒポリト登場。ラシュリオーズ登場。ヒポリトが兄を紹介。ヴィンディス金(かね)をもらってピアトをとらえてくるよう命じられる。ラシュリオーズはピアト、ヴィンディス同一人のからくりを知らぬため、二人に対して「ピアトはおまえたちの妹をわたして世話しようとしたのだが、わたしには応ずる考えはなかった。」と嘘を言い、ピアトに対する憎しみをかきたてようとする。二人退場、ヒポリト再登場してピアトは酒に酔いつぶれていると報告。ラシュリオーズ、ピアト殺害を命ず。ヴィンディスは公爵の死体をピアトのものとみせかけようと弟に提案。

第三場 公爵夫人とスビューリオが腕をとりあって登場。その姿を見たアンビンオーゾとスーパーヴァキュオの兄弟大に怒る。

第四場 ヴィンディス、ヒポリト母親の肩を押して登場、母親が金(かね)のため娘を説いて公爵の息子の情欲を満たさせようとの魂胆はけしからぬと激怒、そこでグレイシアーナは反省し、二人は母を許す。そして二人はまだ仕事があるのだと退場。カスティエーザ登場。母親の望みどおり公爵の息子に身体を与える決心をしたと言う。グレイシアーナが自分は間違った考えをもっていた。今は迷いはれたからそのようなことは決してさせないと言う。娘は母の心を試すため本心でないことを言ったと告白。

第五幕第一場、ヴィンディスとヒポリト変装用(ピアトが着用していた)の衣裳を着せた死体を運んできて、ラシュリオーズに知らせる。ラシュリオーズやって来て死体を見つける。死体を酔いつぶれているピアトと思いこんでいるために二人に剣で刺せと命じ、二人は実行する。死体をのぞきこんだラシュリオーズはそれが父公爵であ

悪人が血を流すとき悲劇は完全なものとなる——「復讐者の悲劇」について

ることに気づき、冷たくなっているところからピアトが殺したものであると断じ、宮廷の者を呼び集める。二三の従者が来てさらに宮廷に知らせにゆく。アンビシオーゾ、スーパーヴァキュオその他貴族登場、公爵夫人とスピュリオも登場。ラシュリオーズは父に付きそっていた二紳士を死刑にせよとわめく。貴族たちラシュリオーズに公爵をつぐよう申し出る。公爵の葬儀と新公爵の祝宴を相談する。スピュリオ、アンビシオーゾ、スーパーヴァキュオそれぞれ自分が公爵にならんものと心中画策。

第二場、ヴィンディス貴族たちに、この際顔廃した公爵領を焼きつくそう、宴会の仮面劇を利用して公爵一族を殺害しようと扇動する。

第三場、新公爵就任式の黙劇 (dumb show) つづいて宴会、この時天の怒りのしるしである彗星が現われる。仮面劇の一隊 (ヴィンディス、ヒポリト、他二貴族) はラシュリオーズと同じテーブルの三人を刺す。雷鳴。別の一隊 (アンビシオーゾ、スーパーヴァキュオ、スピュリオと廷臣一人) が踊りながら登場、「助けてくれ、謀叛だ」というラシュリオーズの瀕死の声を聞くや否や、まずスーパーヴァキュオが「公爵になる」と宣言。それをアンビシオーゾが刺し殺す。次いでスピュリオがアンビシオーゾを、廷臣が主人の仇とスピュリオを刺殺、仮面を脱いだ最初の四人再登場、アントーニオ役人を連れて登場、ラシュリオーズはまだ生きていて、結局スピュリオを刺した廷臣が全員の殺人者としてひきたてられる。アントーニオこの者を死刑にと言う。ヴィンディス、ラシュリオーズの耳もとで他にきこえぬようこれまでの経緯を話してきかせる。ラシュリオーズ死ぬ。列席の貴族たちアントーニオを後任の公爵に推す。ヴィンディス手柄を誇ってアントーニオに事の顛末を教える。しかし予期に反してアントーニオはヴィンディス兄弟を悪党と断じ、即刻死刑を命ずる。「公爵を殺したからにはわたしをも殺すであろうから。」と言って。これをきき弟ヒポリトは愕然とするが、ヴィンディスはあきらめ、役人に護衛され退場、アントーニオの「悲惨な季節だ、彼らの血があらゆる謀叛を洗い流してくれますように。」という言葉で幕となる。

ANTONIO

How subtly was that murder 'clos'd! Bear up
Those tragic bodies; 'tis heavy season.

Pray heaven their blood may wash away all treason (V. iii. 125-7)

このようにして、復讐は第二のそして最後の頂点に達した。ヴィンディスは己れの行為が道理にかなない、天の命ずるところに従っているという確信がある。ゆえに遅疑逡巡するところがない。公爵殺害後、第五幕第二場でこの顔廃のきわみにある公爵領を、好色を以て鳴る嫡男ラシュリオーズに継承させることは天の意志に反することと

して、そうさせまいと貴族たちを扇動したわけである。その結果ヴィンディスがラシュリオーズ殺害に成功し、次いで兄が弟を、庶子とその兄をという具合に連続して殺人がおこなわれ、一族すべて無に帰すことになる。一方ではこのように事がはこび、他方ではこれもまた天の配剤であろうか、どうしてもラシュリオーズを案内してカスティーザのところへ行かねばならない羽目に陥った時、公爵夫人寝室への侵入事件となって救われたのである。現代は無論のこと当時の観客にとっても、あまりにも出来過ぎと思われるほどの趣向であるが、ターナーは当時の色と欲のうずまくイタリア——あるいは舞台はイギリスに移してもよいが——において善は善、悪は悪とする態度を示さなければならなかったのだろうか。

「出来過ぎ」という点からみれば、唯一反対の現象は、第五幕第三場の最後になって、突如ヴィンディスが、新たに公爵に就任することになるアントーニオに、公爵とラシュリオーズ二人の殺害は自分と弟ヒポリトのしわざであると告白するところである。この件は黙していれば旧公爵の廷臣の罪とみなされ、兄弟の身は安泰であったものをわざわざ申し出るとは如何なる考えであつたろうか。ひとつには公爵家につらなる末子に凌辱されたため自ら死をえらんだアントーニオ夫人をいたみ復讐を誓った点で、アントーニオとヴィンディス兄弟は同盟の関係にあつたためつい心を許したのか、それともヴィンディスが最後にひきたてられて退場する時の次の科白にあるように

VINDICE

.....

but we hate

To bleed so cowardly. We have enough,

I'faith, we're well: our mother turn'd, our sister true,

We die after a nest of dukes—adieu. (V. iii. 121-4)

「……そんなに卑劣に血を流すことはもうたくさん……」の考え方が、ヴィンディス、その背後にあるターナーの倫理、イギリスにおけるルネッサンス期の劇作家の特徴であつたろうか。いささか理解しにくい点が存在するようである。

- 1) Boas, F.S.: An Introduction to Stuart Drama (OUP 1946) p. 209.
- 2) Lawrence J. Ross (ed): The Revenger's Tragedy (Regents Renaissance Drama Series 1967) p. xvii.
- 3) Eliot, T.S.: Cyril Tourneur (Selected Essays, Faber 1932) p. 185.
- 4) Ibid. p. 189.
- 5) Salinger, L.G.: Tourneur and the Tragedy of Revenge (Volume 2 of the Pelican

悪人が血を流すとき悲劇は完全なものとなる——「復讐者の悲劇」について

Guide to Eng. Literature: Penguin Books 1955) p. 336.

- 6) Bradbrook, M.C.: Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy (Cambridge UP. 1933) p. 165.

(たにざき ひさと 本学助教授 英語)